

平成 25 年度進路講演会

ロバート キャンベル氏

をお迎えして



「ONE STEP AT A TIME!」

平成25年度の進路講演会は、11月7日(木)本校体育館において開催された。今年、東京大学大学院教授で日本文学研究者のロバート キャンベル氏をお招きし、全校生徒・教員・保護者をあわせて約1,200名の聴衆のもと、ご講演いただいた。演題は、「日本人の楽観と憂鬱－「楽しく生きること」を人々はどうか考えてきたか－」であった。

「人間にとって『幸福』とは如何なるものなのか」という難題は、いつの時代・どこにいても容易に解き明かすことができないもので、現代人でも、150年前の人でも、1000年前の人にとっても、また100年後、1000年後の人にとっても悩ましい問題であろう。

今回のロバートキャンベル先生のお話は、まさにこの問題についての考察であり、日本人にとっての「楽」と「苦」の捉え方を、主に日本人の書いた文献から、解き明かそうと迫ったものであった。



まず、「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」とアイルランド系移民の祖父から聞いた言葉だという「Every cloud has a silver lining」を比較し、よいことも悪いことも長続きせず、連環すると考える日本人と、「幸福」をお金と結びつける欧米人との違いを指摘された。次に、英国留学中の夏目漱石が講義ノートに書き残したローレンス・スターンの言葉や和辻哲郎への書簡(葉書)、「楽」をランク付けした沢庵禅師の『玲瓏随筆』、松平定信の『退閑雑記』、漱石の『草枕』には日本人の「苦楽」に対する共通した人生観・世界観があると指摘した。橘曙覧の『独楽吟』の歌を英訳も交え、紹介して講演のまとめとされた。

【ご講演の一部抜粋】

18歳の時には、まだ日本語と出会っていなかったが、大学に入り、19歳の時に初めて日本語を勉強し始めた。それまでにフランス語やドイツ語を高校時代に少し勉強していたが、日本語はすごくおもしろかった。「英語を母語とする人は、日本語は難しく、発音・文法がわかっても、日本人のように話せる・書けるようにはならない。」といわれていたが、あまり気にせず、とにかくくらくらについて、スポーツとか楽器の練習と同じように、毎日とにかく練習をする・ドリルをするといった努力をした。大学4年の時には、今と変わらないくらいの日本語運用能力を身につけた。

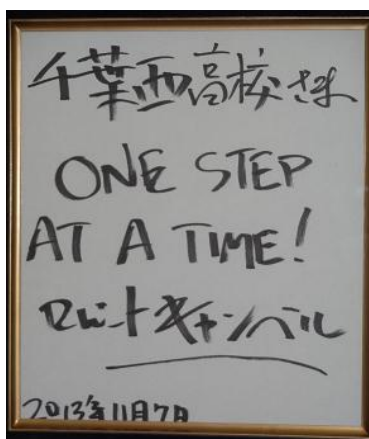


日本語を使って「進路」として何をするかということについて、日本語を学びながら、経済・ビジネス・法律といったものに触れて、最終的には(日本の)文学研究、前近代研究に決めた。

(困難と思われる物事には)最初から天井のようなものがあって、その天井を突き破ることは出来ないといったことを言われたが、「今からこんなことをやっても間に合わない、うまくならない、彼らと同じレベルにはなれない、彼らと同じステージには立つことはできない」といったことについては疑ってみることである。人間が持ち合わせている能力は、自分一人一人ではわからないものであるから。「そこそこでいいよ」ということを心の中で「それは違う」と思って物事に取り組むことだと思います。

練習やいい仲間・いい先生・ライバルといった環境もあるが、「自分が何をやりたいか」をいつも練習をしながらその先に何があるかを見失わないようにして、進路を是非決めてもらいたい。

日本語習得の体験を踏まえ、難題と思われる物事をやってもみないうちに諦めることは不要であり、天井を超えたところにある世界へ行く挑戦をすべきだということや日々努力することが、いかに大切であるかというメッセージも生徒諸君に贈ってくれた。



(揮毫していただいた色紙)



生徒会長からのお礼の言葉と生徒副会長からの花束贈呈後、和やかに会場をあとにされるキャンベル氏。



《校長室にて》

日暮校長・ロバートキャンベル氏

田村副校長・平野教頭

澁みない、知性に裏打ちされた日本語の波が、怒濤のごとく押し寄せてきて圧倒されんばかりでエドワード・サイデンステッカーやアーサー・ウィリー、ドナルド・キーンといった日本文学とゆかりの深い人々とは、一味違った知性と出会えた喜びを感じることができた。まさに、氏の説いた「楽」、言い換えると「至福」の時間が与えられたひと時であった。又同時に、我々に改めて「幸福」とは如何なるものかという一石を投じる講演でもあった。